

韓国における日本留学フェア（一橋大学ブース）の来談状況の分析 ー中国（1999）での質問紙調査との比較からー

横田 雅弘

要旨

日本留学のための情報提供フェアである「日本留学フェア」（主催は（財）日本国際教育協会）の来場者の実像とその効果を質問紙により測定した。九州大学が1999年の中国のフェアで用いた質問紙をもとにハングル版を作成し、韓国の一橋大学ブースで実施して50票の有効回答を得た。来場者は20代の大学生が半数以上で、留学先としては90%近くが日本を第1希望とし、70%以上が大学院への入学を目指しており、ほぼ全員が教育年数の上では入学資格を満たしている。専攻については、商学ならびに社会学の希望が多い。日本語力、英語力ともに自己評価ではあるが、ある程度の力量を備えている。ただし、資金的には親を頼りにしつつも奨学金に期待している。入学希望時期については、4月入学を考えている者が多く、1年半後の留学希望が最も多いが、半年後という者も少なくない。

今回の調査結果は、全体として中国での調査結果と驚くほど一致していた。彼らは留学フェアに「何となく来ていた」のではなく、具体的に日本留学を考えている者たちであった。

キーワード 日本留学フェア、韓国と中国のフェアの比較、実像と効果の測定、改善提案

1 はじめに

日本留学フェアは、（財）日本国際教育協会が主催する日本留学のための情報提供フェアで、1990年以降、中国、韓国、台湾、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、アメリカ合衆国（以下アメリカとする）のいずれか数箇所ですべて毎年開催されてきたものである。

本報告は、2000年11月18日（土）19日（日）に韓国ソウル市において開催された日本留学フェアにおいて、一橋大学ブースに立ち寄り、質問紙に回答してくれた来訪者のデータを分析したものである。今回用いた質問紙は、1999年11月12日18日に中国の北京および上海で開催された同様の留学フェアで九州大学によって用いられたものを基本的に踏襲し、『九州大学留学生センター紀要』第11号に掲載された白土（2001）の報告「中国における日本留学フェアの来談状況の分析」と比較検討したものである。

2 日本留学フェアの宣伝効果に関する様々な評価とその原因

日本留学フェアの宣伝効果に関する議論は賛否両論様々であるが、その原因について白土は、来訪者の分析が不十分であり、出展する大学の期待と来訪者のニーズが必ずしもマッチしたものではないことをあげている。白土は、宣伝効果に関する意見はおおよそ次のようなものであると紹介している。

- (1) 来談者の、総体的な意味での「日本留学」への関心を高める効果はあるだろう。さらに、現地の教育関係者との懇談や現地のマスコミ報道による宣伝効果はかなり広範囲に及ぶ。
- (2) 来談者から見れば、開催日時と場所が限られ、留学を希望する教育機関が参加してい

ない場合もあり、入手情報は限定される。教育機関を選択する機会としては適切ではない。

(3) 自己の教育機関の学生募集効果がある。実際に入学した例がある。

(4) 自己の教育機関の学生募集効果はほとんど期待できない。

このように評価が分かれる原因を白土は、個々の参加教育機関によって日本留学フェアに期待するものが異なっていることと、来訪者の属性やニーズについてきちんと把握していないことの二つであろうと述べている。つまり、日本留学フェアで期待する効果をあげるためには、参加大学は次の4つの効果を大学のニーズに基づいて戦略的に追求していかなければならない。そして、そのためには、来訪者がそのうちのどの段階にあるのかを知って、彼らが次の段階に進めるよう適切に働きかけねばならないという。

4つの段階とは、①特定の事物（日本留学）に対する関心や意欲を高める効果（関心や意欲を高める段階）、②事物の中の多くの選択肢から、幾つかに絞らせる効果（日本が留学先国の選択肢の一つに選ばれるよう選択基準を明確化させる効果）（選択基準を明確化させる段階）、③幾つかに絞った選択肢から一つを選ばせる効果（最終的に日本を選ばせる効果）（比較検討して選考させる段階）、④選んだ一つの選択肢へ接近する方法を知らせる効果（日本留学の方法を具体的に知らせる効果）（接近方法の情報を提供する段階）（括弧内筆者）である。

ところが、これまでこのような来訪者のニーズを個別ブースで把握することは十分でなかった。そこで、白土の中国留学フェアでの調査ならびに今回の韓国での調査は、来訪者の属性と彼らが日本留学フェアに何を期待しているのかを情報収集し、日本留学フェアをより効果的に利用する基礎データを提供するものである。

3 一橋大学ブースの来談状況

2000年11月18日（土）19日（日）、ソウル市のロッテホテルを会場とした日本留学フェアには、主催者の発表で2日間合わせて1674名の来訪者があった。一橋大学のブースには、資料を受け取っただけの来訪者を含めると、約100人が訪れ、そのうち約60人が座って説明を聞き、50人がアンケートに回答した。

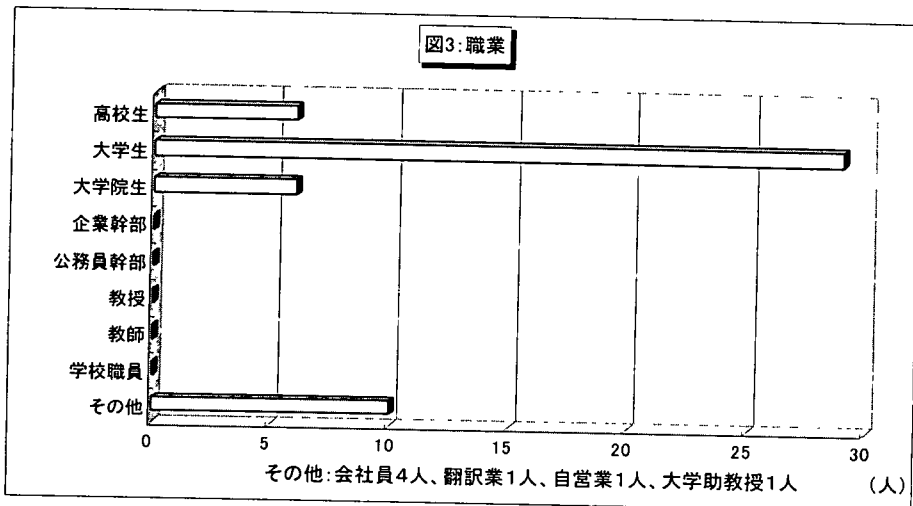
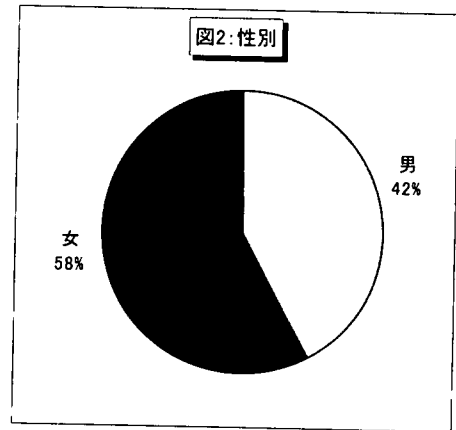
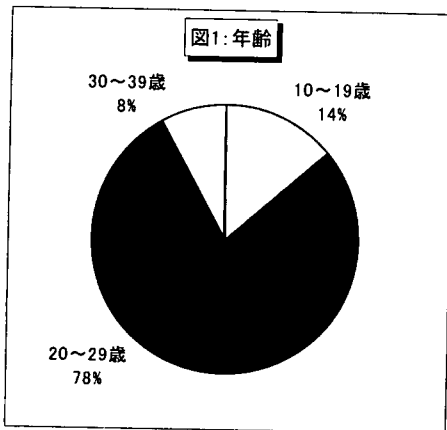
一橋大学のブースには、留学生センターから2名の教官（五味政信センター長と筆者）が参加したが、現地では、一橋大学社会学研究科で博士号を取得した元留学生で、現在湖南大学教授である金太基氏が元留学生3人に声をかけ、通訳兼説明係として来訪者に対応してくれた。彼らは皆、留学を自らの体験として熱心に説明してくれた。来訪者には大変有意義な説明であったと思われる。

4 アンケートの結果

以下、アンケート調査結果について、白土による中国での調査報告と比較しながら述べる。

4-1 回答者の年齢、性別、職業（図1、2、3）

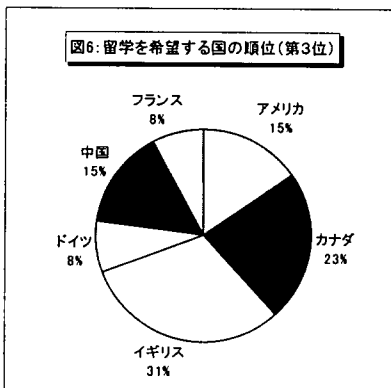
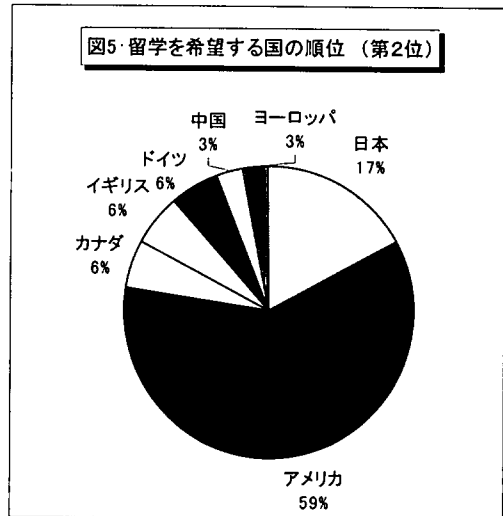
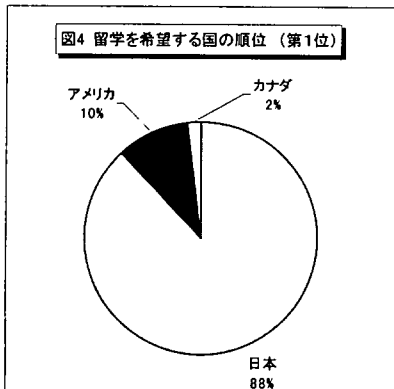
図1に示す通り、39人(78%)が20代で、7人(14%)が10代、4人(8%)が30代で40代はいない。この割合は中国での調査とほとんど同じである。性別でみると、男性(42%)よりも女性(58%)がやや多いが、これも中国のものと同じである。職業でみると、大学生が28人(56%)、大学院生と高校生はともに6人(12%)であり、合計すると90%が学生ということになる。中国の調査では、学校職員が16.7%、大学教員が4.2%いるが、韓国ではほとんど来ていない。これは広報活動の違いからくるものではないかと思われる。ちなみに、ソウル大学の日本語教員によれば、学生向け掲示板では掲示してあったらしいが、日本語教員がこのフェアについて知らされたのはほんの数日前であったとのことである。

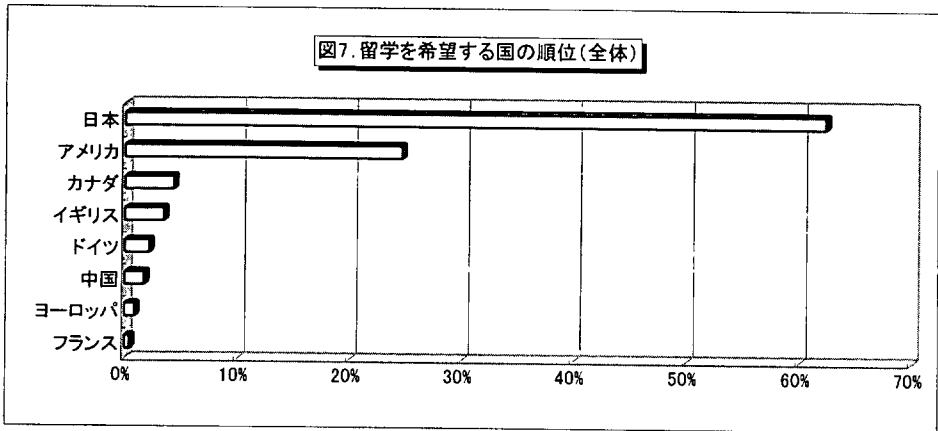


4-2 日本留学の動機

4-2-1 留学希望国の順位 (図4 7)

留学希望国を上位3カ国問うところ、図4に見られるとおり、第1希望では日本が44人(88%)と圧倒的に多く、次いでアメリカの5人(10%)、カナダの1人(2%)であった。上位の順位は中国の場合と同じであり、中国の調査でも日本を希望する者が74.4%であったが、韓国ではそれよりもやや高かった。図5の第2希望では、アメリカが59%と高く、中国の調査の23.8%を大きく上回った。第2希望の2番目は日本で、17%である。第1希望で日本を1番目にあげなかった12%の者も、第2希望には全員が日本をあげている。このフェアは日本留学フェアであるから当然の結果とも言えようが、説明者が日本側の人間であることのインタビュー効果を差し引いても、一応日本を留学希望国としてすでにかなり絞っている者が来訪していると考えられる。さらに言えば、ほとんどの来訪者は日本を第1希望としているが、それらの者の多くは第2希望にアメリカ(またはカナダ、イギリスなど欧米英語圏)をあげており、前述の③絞られた選択肢の中から最終的に決定する段階にあって、日本とアメリカの二者択一の状態にあると言えよう。この結果も中国と同様である。



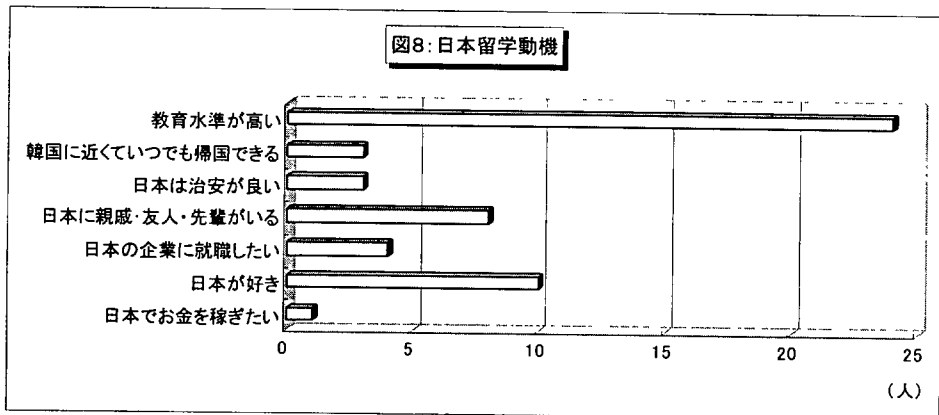


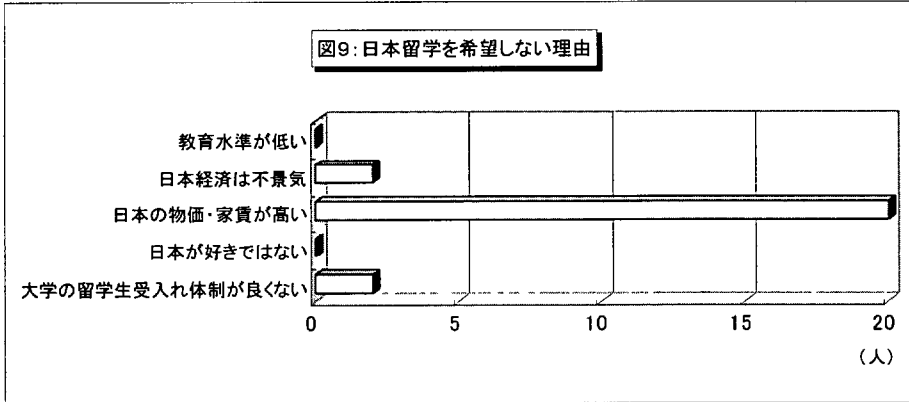
4-2-2 日本留学を希望する・希望しない理由

日本留学の動機に関して、図8の8項目（中国の調査では「同じ漢字圏で安心」を加えた9項目）から複数選択させている。「その他」は回答がなかったため、結果的に7項目の回答になっている。

最も多い回答は、「教育水準が高い」の24人(48%)で、中国の調査では59.5%とさらに多い。両国ともに日本の教育に高い期待を持っていることがわかる。渡日後、日本の大学に失望するというケースも耳にするが、渡日前の期待が高いこともその一因としてあろう。2番目の「日本が好きだ」は10人(20%)で、これも中国と順位は同じである。中国は割合では31.5%とさらに高い。3番目は、「日本に親戚・友人・先輩がいる」の8人(16%)である。中国では、3番目として、約15%の人が「日本の企業に就職したい」「同じ漢字圏で安心」「近いのでいつでも帰国できる」の3項目をあげている。これらは韓国ではそれほど多くない。ただし、全体に韓国の回答者は複数回答可であっても1つしか回答していない者が多く、中心的な理由のみあげたものと思われる。

留学を希望しない理由を訊いた図9では、20人(40%)が「日本の物価・家賃が高い」をあげている。留学を希望しない理由というよりも、留学はしたいが、この面でマイナスの要素があると理解することができよう。リーズナブルで個室をもつ大学寮の整備が望まれる。

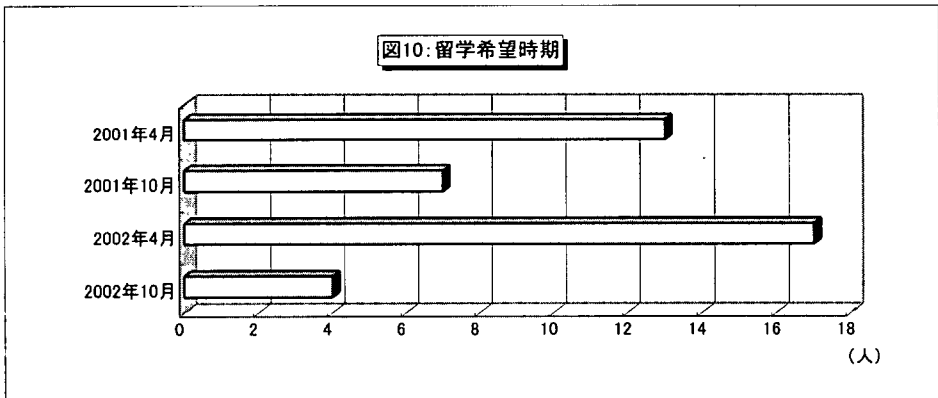




4-3 留学希望時期

日本への留学時期は、図10の通り、2001年4月（13人、26%）と2002年4月（17人、34%）が多い。すなわち、1年半後の留学を考えている者が一番多いが、半年後を考えている者もその次に多いのである。半年後を考えている来訪者の多くは、すでに日本語力があり、具体的に一橋大学の受験を予定していたり、最終的にどの日本の大学を受験するか決める段階にいる者である（前述の第3または第4段階）。中国の調査では、1年～1年半先の留学を考えているものが約半数であるが、これは10月入学を希望する者も多いからで、韓国では多くが4月入学を希望している。

日本語力もかなりある者が来訪していること、日本留学を第1志望に決めている者がほとんどであること、さらに4月入学を前提としていることを考えると、フェアの時期としては入学予定の1年前あたりがよいのではないかとも思われる。とすると、2月ないしは3月ということになる。中国での調査でも、フェアの半年後を希望する者が少なくなかったことなどから、同様に11月の実施は少し遅すぎるのではないかとの見解が述べられている。



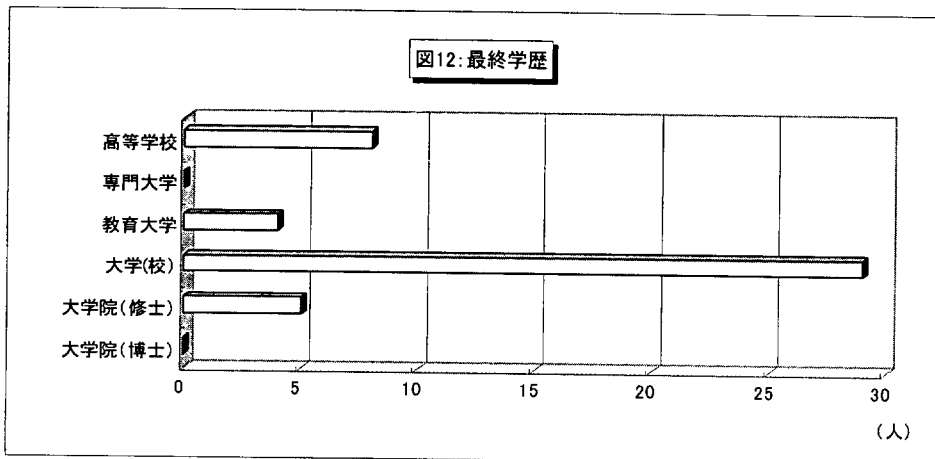
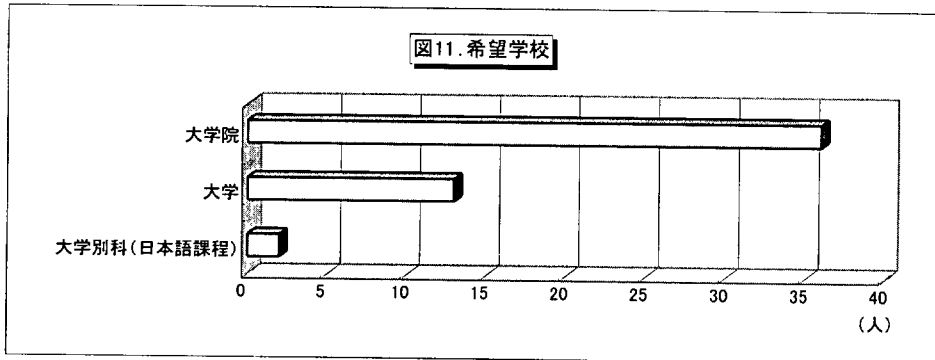
4-4 学力・語学力・留学経費からみた来訪者

白土は、日本の教育機関（大学や日本語学校等）に入学するための審査基準が、学力・語学力・経費支弁能力であることから、この3つをまとめて検討している。ここでもそれに合わせて検討する。

4-4-1 希望する学校と受験資格

図11をみると、この留学フェアの一橋大学ブース来訪者の4分の3弱が大学院入学を希望していることが特徴的である。大学院希望者は、全員が図12にみる大学、教育大学、大学院修士課程の現在の在籍者または卒業者であった。また、学部入学希望者は、高校生またはそれ以上の学歴をもっている。すなわち、来訪者の全員が、学歴の点では一橋大学の学部または大学院への受験資格をもっていた（その見込みを含む）。

中国の調査では、学部希望者が34.5%と最も多く、大学院の19%を大きく上回っている。中国の調査でも、学歴をみると約70%が学部レベルであるが、中国の大学の専科在籍者は日本の学部レベル入学を希望している。中国の大学の本科在籍者でも、その25%は日本で学部から学びたいと考えている。高等教育のシステムが韓国と中国では多少異なるし、また総合大学である九州大学と社会科学のみの一橋大学という違いがあるので単純に比較できないが、韓国ではすでに学部 に在籍する者は日本ではほぼ例外なく大学院を目指すようである。

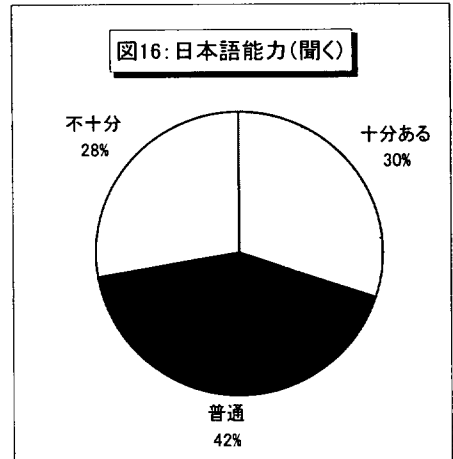
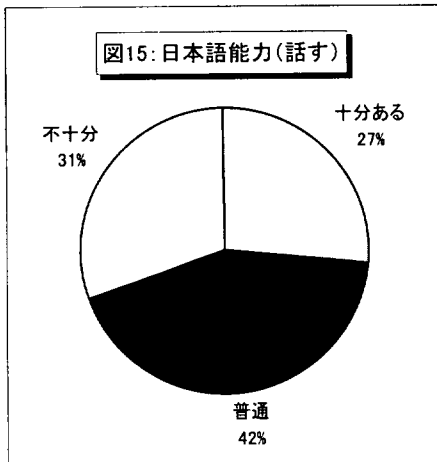
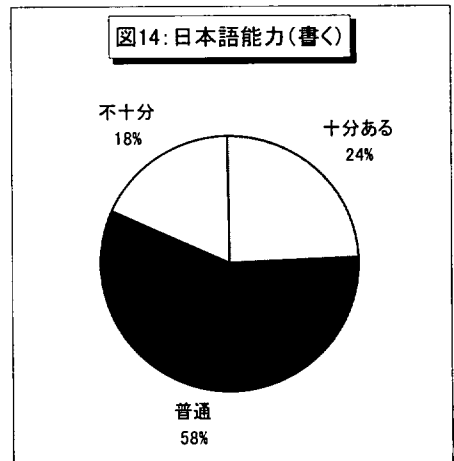
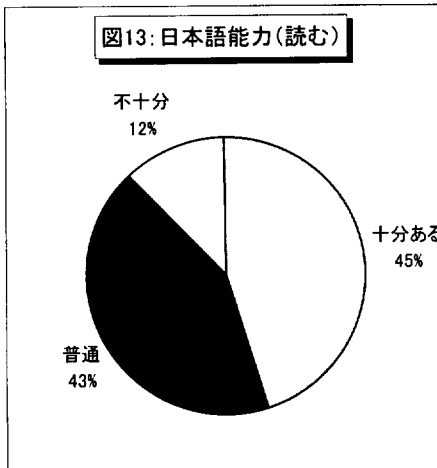


4-4-2 日本語能力と英語能力の水準

4-4-2-1 日本語能力の水準 (図13～図16)

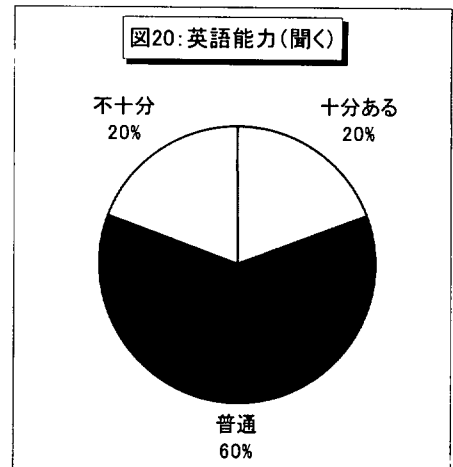
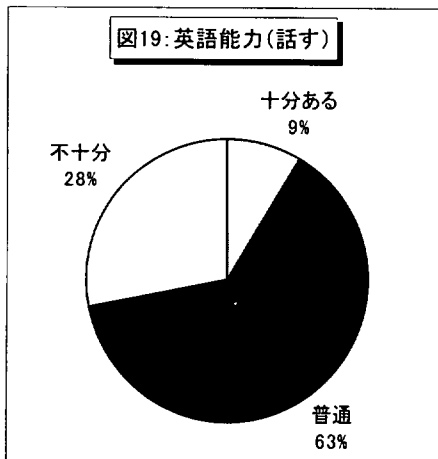
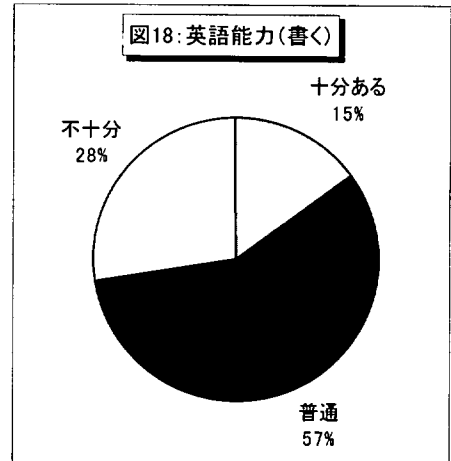
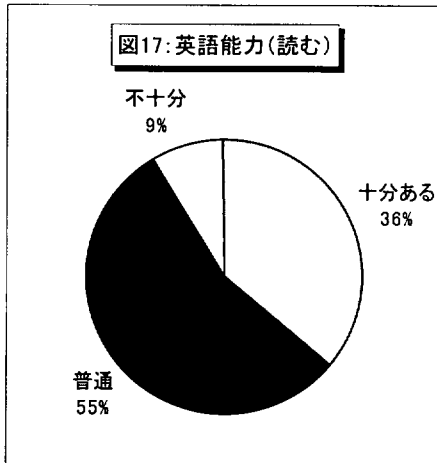
中国での調査と同様、回答者の自己評価であり、試験等による客観的評価ではない。しかし、ある程度希望する教育機関に入学できる状態にあるか否かの情報にはなる。

日本語については、中国の調査では「読・書・聴・話」の4つの能力は平均しており、『十分ある』という回答は全体の10～20%であった。韓国では、「書・聴・話」の3つの能力で24～30%、「読」では45%と大変高くなっている。また、『普通』という自己評価をした者を加えると、中国の調査では70～80%が『普通』以上のレベルにあると報告されているが、韓国の調査では、「聴・話」で70%、「書」で80%であるが、「読」では90%以上が『普通』以上のレベルであると自己評価している。実際、フェアの会場でも、日本語で十分にやり取りできる来訪者が多かった。中国よりも自己評価が高い傾向があるのは、ひとつにはハングルと日本語の文法的な類似性があるが、大学院レベルの入学希望が多いことも一因であると思われる。



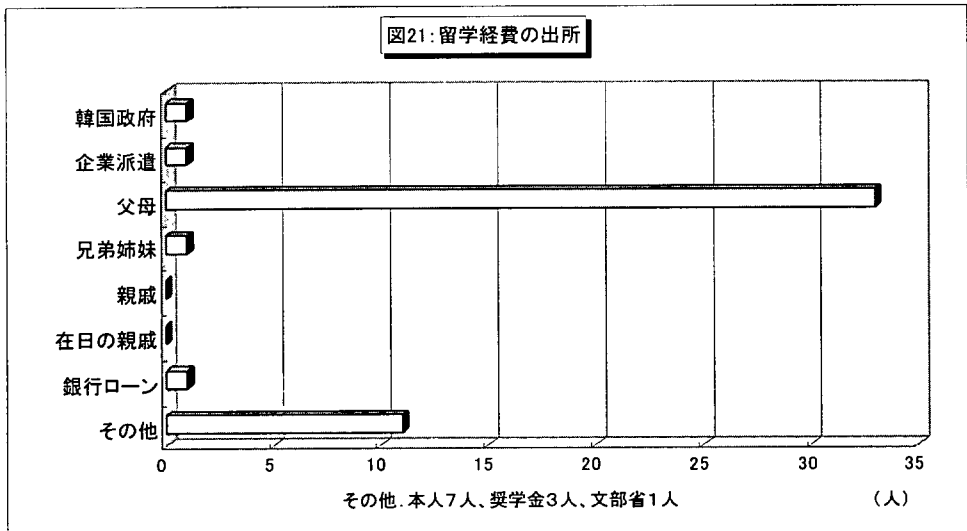
4-4-2-2 英語能力の水準（図17～図20）

中国の調査では、『十分である』との回答は、「読」で約20％、その他では10％となっている。韓国でも、やはり「読」で最も高く、36％であり、その他は低くなって「書」で15％、「聴」で20％、「話」ではさらに低く9％である。『普通』と答えたものを含めると約70～80％で、「読」だけが90％となる。日本語と英語の能力を比べてみると、『十分ある』という評価は日本語の方が多少高いが、全体的にはほぼ同じ程度とみてよいと思われる。



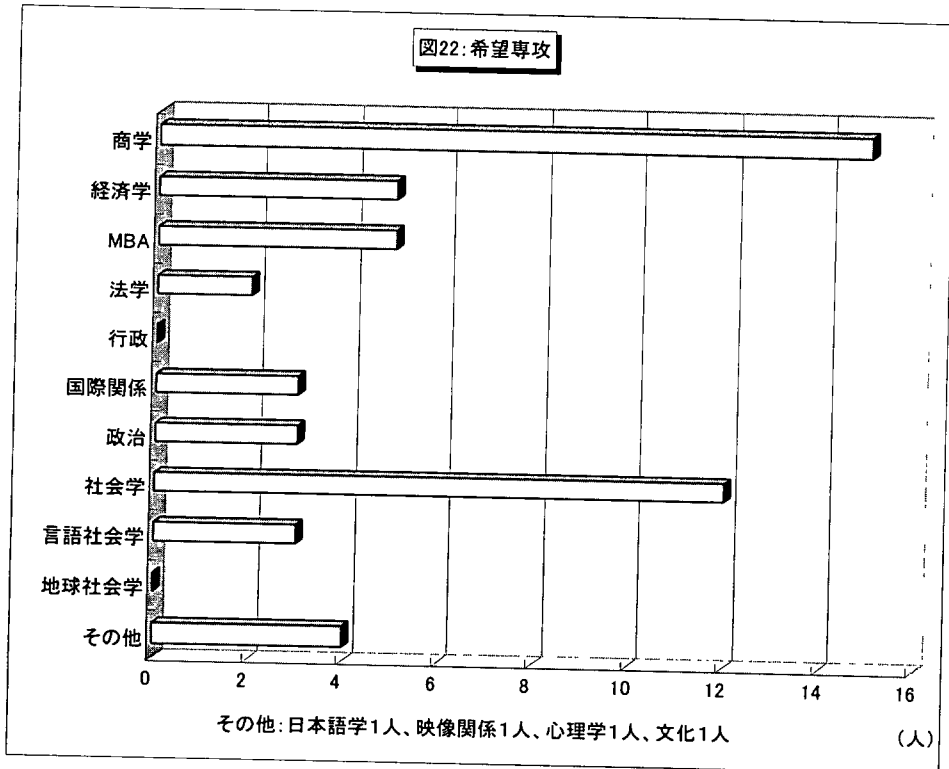
4-4-2-3 留学経費の出所

留学経費の出所は、図 21 でわかるようにほとんどが親であり、中国の調査と同じくその割合は約 69%である。ただし、これは留学経費が親から全学提供されることを意味しない。既に留学している学生たちの現場から考えると、実際には親からの支援は受けるが、それは一部であって、奨学金やアルバイトを期待しているというケースが一般的であろう。4-6 の知りたい情報のトップが「奨学金」であることから予想される。この他、中国の調査と比べると、中国では「親戚」(8.3%)、「在日の親戚」(6%)、「兄弟姉妹」(4.8%) など、親族が 20%近くあるが、韓国ではほとんどないことが対照的である。「自分」という回答は約 14%あるが、それ以外の回答はほとんどない。一橋大学では、韓国からの政府派遣の学生を毎年受け入れているが、政府派遣や企業派遣の学生はあまり来訪していないようである。フェアの広報の問題かもしれない。



4-5 希望する専攻分野

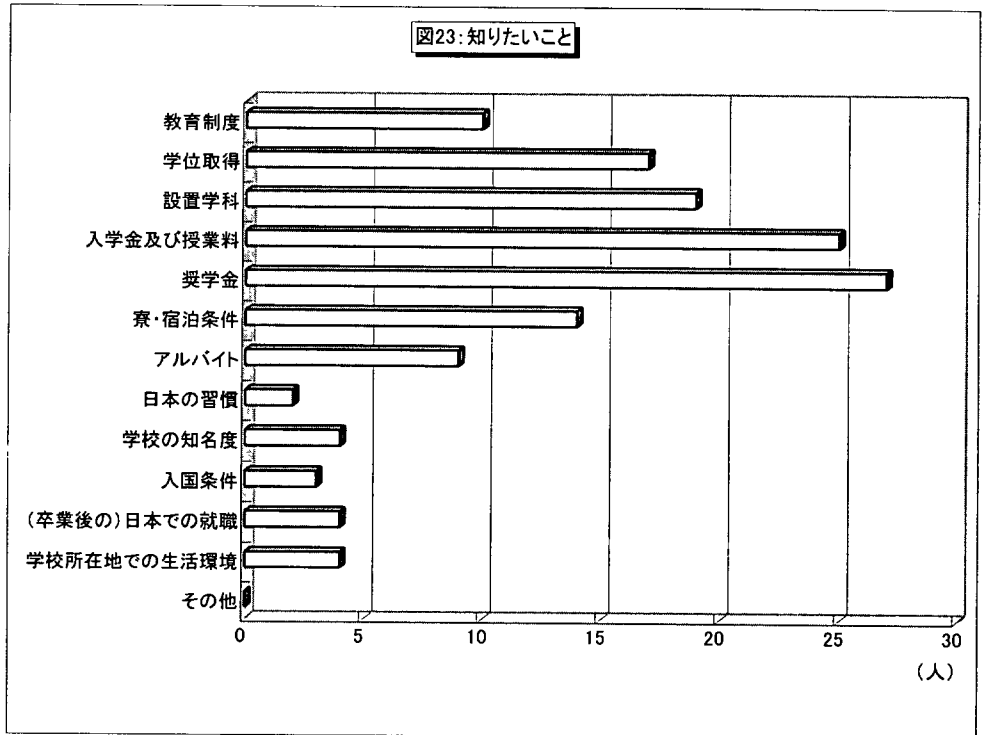
希望する専攻分野に関する図 22 をみると、商学の約 30%と社会学の約 24%が多い。商学では、MBAを含めると約 40%に達する。これに対して、経済学は約 10%と少なく、法学では約 4%とさらに少ない。中国での調査は、九州大学が総合大学なので比較は難しいが、最も希望の多かったのは「経済・経営」の 48.8%で、「法律・行政・政治」の 13.1%が続く。興味深いことに、文系志望が理系志望の 4 倍以上にのぼったという。韓国の調査では、「法律・行政・政治」を合わせると約 10%であり、経済と経営を中国の分析に合わせて一つにまとめてみると約 50%になる。こうしてみると、今回の調査も九州大学の上位 2 つの割合とほぼ同じであると言える。



4-6 知りたい留学情報

最後に、来訪者の知りたい留学情報がどのようなものかを見てみよう（図 23）。ここでは複数回答した者が多く、回答数は 132 となっている。最も多い回答は「奨学金」（19.6％）で、2 番目に「入学金及び授業料」（18％）と経済的な問題が上位を占める。「寮・宿舍の条件」で 10％（5 番目）、「アルバイト」で 6.5％（7 番目）も経済的な側面と関連が深い。ただし、複数回答なので、これら 4 項目全部を選んだ者が 4 人、3 項目および 2 項目選んだ者は 10 人いる。これらのどれか一つ以上選んだ者は 32 人となっている。前述の 4-2-2 「日本留学を希望しない要因」にも「日本の物価・家賃が高い」をあげた者が特に多いが、これも経済的な面の不安を物語っている。

知りたい情報の 3 番目は「設置学科」（13.8％）で、上位 3 番目までの順番は中国での調査と一致する。中国での 4 番目は「入国条件」であるが、韓国ではほとんど問題になっていない。中国で 5 番目である「学位取得」が韓国では 4 番目で、「教育制度」が 6 番目である。これらの順位は「入国条件」を除いてほぼ中国の調査と一致する。「日本の習慣」、「生活環境」、あるいは「卒業後の就職」といった大学での勉学・研究からすると周辺的な問題については、それほど知りたいという希望はない。



5 おわりに

1999年の中国における留学フェアで九州大学が実施した質問紙をほぼそのまま使用し、比較検討する形で分析した。一橋大学のブースで説明を受けた者約60人のうち、50人が回答した。20代の大学生が半数以上で、留学先としては90%近くが日本を第1希望としている。また、70%以上が大学院への入学を目指しており、ほぼ全員が教育年数の上では入学資格を満たしている。専攻については、商学ならびに社会学の希望が多い。日本語力、英語力ともに自己評価ではあるが、ある程度の力量を備えている。ただし、資金的には親を頼りにしつつも不安は高く、奨学金に期待している。入学希望時期については、4月入学を考えている者が多く、1年半後が最も多いが、半年後という者も少なくない。

今回の韓国での調査結果は、全体として中国での調査結果と驚くほど一致していた。白土の述べるとおり、彼らは留学フェアに「何となく来ていた」のではなく、まさに日本留学の志望者であり、真剣に情報を求めて来ていたのである。

最後に、一橋大学ブース来訪者から見た韓国留学フェアについての評価と提案を簡単にまとめたい。

第1に、このフェアの一橋大学ブースへの来訪者の多くは、日本留学をすでにかんがりの程度絞り込んでいる大学院入学希望者であり、その意味からは、初めに述べた4段階でいうならば第3段階以上にある者である。したがって、日本留学についての興味を喚起する宣伝効果という意味での第1、第2段階の目的にはあまり効果はないとみられる。

第2に、確かに、このようなイベントを開催していること自体が宣伝効果になる可能性はあるが、その効果を十分に発揮させるためには、韓国の大学生への広報をはじめ、大学の日本語教員への広報などをより徹底させる必要があると思われる。また、日本留学についての公開シンポジウムや日本留学を終えて帰国し韓国で活躍している著名人の講演会などの企画も取り入れて、雰囲気盛り上げる必要もあるのではないだろうか。

第3として、第3段階にあって具体的に大学の絞込みに入っている者については、専門分野についてのかんがり細部にわたる情報が必要になってくる。大まかな情報はすでに来訪者はもっており、実際に大学担当者からはより細部の具体的な情報を求めるのである。白土が提案しているように、研究科の専攻内容等に関する相談対応用のマニュアルなどが用意されていると便利であろう。

第4として、一橋大学ブースを手伝ってくれた元留学生が口をそろえて話していたことは、インターネットがほとんどの家庭に普及している韓国にあっては、ハングルによるホームページを作成することが何にもまして効果的だということであった。実際、そのような業務を請け負う業者がいくつもあり、一橋大学のブースにも、元日本留学生で現在そのような仕事をしているがどうかと商談を持ちかけてきた者もいた。特に、第1段階、第2段階にある留学予備軍については、これが最も効果的であると思われる。

また、一橋大学は日本においては評価の高い大学であるが、韓国では必ずしも一般的な知名度はない。東大、京大、慶応、早稲田等に比べて知る人は少なく、その意味からも多数の目に触れるインターネットでその業績や歴史を知らしめることは、新しい留学候補者に対する宣伝効果というだけでなく、一橋大学を卒業して帰国し、韓国で活躍している元留学生たちにとっても意味のあることと思われる。

引用文献

白土悟「中国における日本留学フェアの来談状況の分析」、『九州大学留学生センター紀要』第11号、1～14頁、2001。

謝辞

九州大学留学生センターの白土助教授には、今回の質問紙のベースとなった中国用の質問紙の使用をご快諾いただき、また貴重な助言もいただいた。心より感謝したい。また、この質問紙のハングル訳を引き受けてくれた元一橋大学留学生（現特別研究員）の文孝淑氏にも感謝したい。

留学フェアの会場では、4人の元留学生がボランティアとして一橋大学のブースを手伝ってくれた。李在烈氏、Tim Woochang Jung氏、J.H. Choi氏、特に彼らの手配から2日間の説明まで本当によく手伝ってくれた金太基氏に感謝したい。元留学生にここまで尽くしてもらえたことは、今回のフェア参加で得た大きな宝物である。

